九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

笠栄治編『平治物語研究校本編』

橋口，晋作
鹿児島県立短期大学助教授

https://doi.org/10.15017/12013

出版情報：語文研究. 58, pp.57-60, 1984-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

〈紹介〉

笠栄治編『平治物語研究校本篇』

橋口晋作

本「校本篇」を含む一連の御研究に依って学位を授与された笠栄治氏が、長年にわたって、軍記物についての精緻な基礎的研究を展開して来られたことは筆者が改めて述べるまでもないことであり、又、氏が軍記物研究者（に限定されるものでは勿論なく、様々な角度から利用されることは承知の上で）垂涎の校本や索引といった基礎的資料を作成して刊行する計画をもち、それらが着々と果たされて来ていることも周知のことである。この度の『平治物語』の校本作成のことも、既に井手恒雄氏が本誌第二十三号（昭和四十二年二月発行）所載の新刊紹介「笠栄治氏著『陸奥話記校本とその研究』」の中で、笠氏からの書簡を引いて報じられていたことであり、『平治物語』に関心を持つ者の久しく待ち望んでいたものであった。

『平治物語』諸本の分類と系統立てについては、戦前、金刀比羅宮所蔵本古出説を唱える高橋貞一氏に「保元・平治物語諸本の研究」（『平家物語諸本の研究』昭和十八年八月発行　付録）という成果があったが、今日では、学習院大学付属図書館所蔵本系統古出説を唱える永積安明氏の「保元・平治物語の形成と展開」（『中世文学の成立』昭和三十八年六月発行　所載。日本古典文学大系『保元物語　平治物語』昭和三十六年七月発行　所載の「解説」二、三章に補訂を行ったものが中心。）のそれが一般に用いられている。本「校本篇」が採用している「平治物語の主要な異本と目されるもの」も右の永積氏の分類を踏まえたものであり、学界の現状を反映した、穏当な選択であると言えよう。採用されている諸本を、永積氏による分類を付け加えながら列挙すると次のようになる。

- 島原松平文庫所蔵本　第一類
- 学習院大学付属図書館所蔵九条家旧蔵本　第一類
- 陽明文庫所蔵(一)本　第一類
- 流布古活字第一種本　第十一類
- 京都大学文学部所蔵本　第九類
- 彰考館文庫所蔵杉原本　第十類
- 静嘉堂文庫所蔵八行本　第八類
- 彰考館文庫所蔵元和七年本　第七類
- 京都大学付属図書館所蔵本　第六類
- 彰考館文庫所蔵京師本　第五類
- 彰考館文庫所蔵半井本　第三類

金刀比羅宮所蔵本　　第四類
大東急記念文庫所蔵屋代弘賢旧蔵本
（注）順序は校本の配列に依った。

第一類本が三冊とも翻刻して対比配列されているのは、一つには島原松平文庫所蔵本が上巻を欠いて中・下巻二冊のみ、学習院大学付属図書館所蔵本が上巻「第四類本（但し字句に多少の異同ある第四類内の一種）」（前出「保元・平治物語の形成と展開」）の為これも中・下巻二冊のみ、陽明文庫所蔵㈠本の下巻が「巻末に頼朝伊豆下着の条につづいて、彼の出世を寿ぐ短文の追記を有する第七類本と同様」（同前）の為こちらは上・中巻二冊のみ　といった事情の為に三本を合わせなければ第一類本の本文が再建されないということからであるが、もう一つには、第一類本三本の関係についての笠氏の見解「陽明文庫本は学習院大学本が増補改訂される以前の姿を残映するものである」「松平文庫本は、その増補改訂以前の姿を残存する個所があり、松平文庫本が直接増補した一本の想定を許されるなら、その想定される一本と陽明文庫本とは少くとも親子関係ではなかったと考えられる」「学習院大学本は、中巻に於ては陽明文庫本との距離を比較的近く置き得たが、その基準がない下巻に於いても松平文庫本に比べると結果的には松平文庫本程の造化が行なわれなかったと考えられる」（『長崎大学教養部紀要』第十巻　昭和四十四年十二月発行　初出　の笠氏「平治物語第一類本と第四類本の間」の第一類本三本の関係についての考案の、中巻についての纏めから前二つを、下巻についての纏めから最後のものを、私に引用したものである）に従って左から右へ配列しながら、その見解の妥当性を学界に問おうという意図も秘められているものと見る。

採用されていない第二類本というのは平治絵詞の諸本である。絵詞については、永積氏も「ごく一部分しか伝わらず、また物語本文の資料としては、絵詞であることの考慮を必要とする」（前出「保元・平治物語の形成と展開」）と利用の難しさを指摘されているが、笠氏も校本に馴染まないと考えられて割愛されたもので、蓋し止むを得まい。しかし、笠氏には、「平治物語における平治物語絵巻の位置――『三条殿夜討』の場合――」（『軍記と語り物』第七号　昭和四十五年四月発行　所載）外の『平治物語』に於ける平治絵詞の位置を考察された論考が御有りなので、「研究篇」の刊行が切に待たれるところである。

左端に加えられている大東急記念文庫所蔵屋代弘賢旧蔵本は笠氏が「屋代弘賢旧蔵（現大東急記念文庫蔵）平治物語について」（『かがみ』第十四号　昭和四十五年三月発行　所載）で紹介され、「金刀比羅宮本とその同系詞章を有する諸本の本文を金刀比羅宮本で代表させられるならば、その原初形としての弘賢旧蔵本の如きが考えられはしても、金刀比羅宮本の如きから弘賢旧蔵本の如きが現われるとは考え難いと思う」と述べられる注目すべき一本である。

右のように本「校本篇」に採用された諸本を吟味して来ると、先述のように学界の現状を反映した、穏当な選択が行われていると共に、「諸本関係の再吟味に着手している」（『別冊国文学　日本古典文学研究必携』昭和五十四年十一月発行　所載の日下力氏執筆の「平治物語」）と評される笠氏色も出ていることに気付かれるであろう。実は、この笠氏色は諸本の配列に於いて著しいのである。

配列の骨組みは「第一類本と第三類本（第二類本は『平治物語絵巻』の類）以下との懸隔は甚だしく、流布本を介在させねば両者の

接点は見出し得まい」（前出「平治物語第一類本と第四類本の間」）という御見解であろう。これで右端に第一類本、それから左の方向に第十一類本（流布本）、その他の諸本 と配されて行くのである。次に、第十一類本から左側の配列は「弘賢旧蔵本の調査から得た最大の収穫は第三類～第十一類本に貫通している平治物語の柱核が、その伝承の間に継承されたであろう所のものを、更に原点へ近く遡行した位置に据え得る一本であろう事を発見した事にある」「弘賢旧蔵本は、その異同の性格からして金刀比羅本と同範疇のものと考える事ができる」といった前出論考「屋代弘賢旧蔵（現大東急記念文庫蔵）平治物語について」の纏めに基いていよう。これに、「第四類本の変形が第三類本のように私には思える」（前出「平治物語における平治物語絵巻の位置――『三条殿夜討』の場合――」）という御見解を加えれば、左端大東急記念文庫所蔵屋代弘賢旧蔵本、次に第四類本、それから第三類本、更に第五類本から第十一類本への配列が出来上がるのではないか。この配列は、時間的には左、古い方から右へと流れている。

先に筆者は、今日では永積氏の学習院大学付属図書館所蔵本系統古出説が一般に用いられていると述べたが、笠氏のこの「校本篇」の配列は、右のように吟味して来ると、その通説の見直し（結果的には高橋氏の金刀比羅宮所蔵本古出説の支持ということになろうか）を学界に迫るという意図を秘めていることになろう（その点でも、「研究篇」の刊行が強く待たれる）。

各異本の本文を全文翻刻し搭載すれば復原を考えずに済むであろうと考えた。一方、共通部分を共通部分として緯糸に配し、共通ならざる部分即ち校異が、なるべくはっきりと識別できるように対比し配列することを考えればよいように考えた。

右のような「該本の性格」が明瞭に見えるような配慮（ただし、軍記物の性質上、共通ならざる部分が大きく摩れて出てくることがあるので、利用の際は注意を要する）の下に成った本「校本篇」の刊行は、『平治物語』の基礎的研究の現状に一石を投じるものであり、又、更に、この「校本篇」が土俵となってその基礎的研究が一段と深化するであろうことを筆者は信じて疑わない。

ところで、『平治物語』諸本でこれまでに翻刻されているものは、管見では、未刊国文資料刊行会『平治物語（九条家本）と研究』（昭和三十五年四月発行）や日本古典文学大系『保元物語 平治物語』等に所載の数種に過ぎなかった。それが、本「校本篇」の刊行によって一挙に倍以上に増えた訳である（しかも、それが先述のように平治絵詞を除く全種類にわたっている）。これまで、中世軍記物はその厖大で煩雑な異本の有様がその作品の全容の把握を拒んで来た。しかし、昭和五十四年十月に坂詰力治・見野久幸両氏の編で、日本古典文学大系『保元物語 平治物語』所載の『平治物語』（第四類本）を底本とする『平治物語総索引』が刊行され、今、又、ここに本「校本篇」が刊行されるに至って、私達は誰でも中世軍記の一つ『平治物語』のほぼ全容を俯瞰し、容易に必要な事柄を引き出すことが出来るようになった訳であり、この刊行の意義は極めて大きいと言わねばならない。

中世軍記物の校本の作成、刊行というこの画期的な業績も、又、既に井手氏が本誌第三十五号（昭和四十八年八月発行）所載の紹介「笠栄治編『平家物語総索引』」の中で伝えて居られるような、笠氏と前書きに記されている福岡教育大学の国語科の学生諸君との共

同作業の下に完成したものと察する。共同作業と述べたが、その中で学生諸君は真物に接した訳であり、その中で得たものは他では容易に得ることは出来まい。筆者は、笠氏及び学生諸君の労をねぎらうと共に、この共同作業を貫く笠氏の優れた教育方針に、さすがはと感服する次第である。

最後になったが、紹介が大幅に遅れてしまったことについて、深くお詫び申し上げたい。

（昭和五十六年六月、桜楓社発行。八〇〇〇〇円）